

氏名	ゴ トウ ユカリ 後藤友香理
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第147号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉シューマンとフモールー作品18、19、20の再考察－
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 植田克己
（副査）	〃 〃（〃） 岡山 潔
（〃）	〃 〃（〃） 迫 昭 嘉
（〃）	〃 〃（〃） 土田英三郎
（〃）	〃 准教授（〃） 伊藤 恵
（〃）	〃 〃（〃） 東 誠 三
（〃）	国立音楽大学 教授（〃） 藤本一子

（論文内容の要旨）

博士論文『シューマンとフモールー作品18、19、20再考察』は、フモールHumorという美的概念を通して、シューマンの《アラバスケ》作品18、《花の曲》作品19、《フモレスケ》作品20の三作品の新しい解釈を提起する試みである。

フモールは「ユーモア」とは異なった深い意味を持つドイツ独自の概念であり、特にジャン・パウルJean Paul（1763～1825）によってその意味が定義された。シューマンの《フモレスケHumoreske》はその曲名にHumorという言葉を内包していることから、フモールの情調をその曲の中に有していることが予想される。そして、シューマンが熱心なジャン・パウル読者であったことから、シューマンの考えるフモールとはジャン・パウルのフモール論が基盤にあったと思われる。しかし、フモールが美学や文学、音楽が一つに交わったところにある複雑な概念であり、言葉を持たない音楽においてフモールの表れを具体的に論じるのは困難なことから、これまでこの問題の有用な文献はB. Appelの博士論文（Saarbrücken, 1981）のみという状況であった。

《フモレスケ》作品20と相前後して書かれた作品に《アラバスケ》作品18と《花の曲》作品19がある。これら2曲はいずれも短く小規模な作品であることから、サロンピース的な扱いを受けることも多い。しかし、《アラバスケ》、《花の曲》は《フモレスケ》とよく似た雰囲気を持っており、作品番号が連続していることから分かるように同じ精神状態の下に生まれている。そこで、《アラバスケ》作品18、《花の曲》作品19、《フモレスケ》作品20をひとまとめとして捉え、この3曲にジャン・パウルのフモールの感性を適応することで、これらの作品の新たな見方と位置づけを試みた。

シューマンは文学と音楽という二つのジャンルに等しく関心を持ち、才能を発揮した。本稿でも、シューマンの書いた詩や小説とジャン・パウルの比較しその共通性を見ている。そんな資質を持つシューマンだったからこそ、ジャン・パウルのフモール観に深く共感し、作品にフモールを反映させることができたのである。また、作品18～20を作曲した当時のシューマンも、フモール性と同調しやすい精神状態にあった。作品18～20の楽曲分析を行うにあたっては、ジャン・パウルの『陽気なヴッツ先生』（1790）をモデルとした。この小説に焦点をあて、そこに現れたフモールの気質を切り口とし、これらの曲をフモールの観点から分析した。

結果、この3作品には標題においても、基本主題の持つ性格においても、作曲手法にも、フモールの

要素が見られることが分かった。これらの作品に見られる二元性がフモールの感性に通じるのである。作品18と19は、作品20とセットになったフモールの作品と捉えることで、親しみやすい見かけの裏に深い意味合いをさりげなく持たせた知的作品として見直すことができる。また、これら3曲に見られる滑稽で面白おかしい要素は単なるユーモアとして理解されるべきではない。作品の持つ穏やかで優しい雰囲気も、その雰囲気だけを取り出しても作品の完全な理解にはならない。フモールが反映されていると考えることで、初めて作品18～20の真の姿を理解できる。また、音楽でフモールを表現することに成功したこれら3作品は、シューマンのピアノ曲の中でも極めてユニークで重要な位置を占めているのである。

多重の対極性をその精神の中に持っていたシューマンにとって、やはり二重性を持つフモールは、とても同調しやすい概念であった。また、その二重性を利用して精神的な自由を獲得することを目指すフモールは、《フモレスケ》を作曲した当時苦しい精神状態にあったシューマンにとって、その苦しみから一時逃れる術ともなった。つまり、フモールを理解することは、作品18～20のみならず、シューマンの本質と彼の音楽全般を理解する上でも非常に重要なキーワードといえよう。

(総合審査結果の要旨)

シューマンの多岐に亘る音楽活動を解き明かすのはとても難しいが、後藤は論文「シューマンとフモール」で数あるキーワードの中から「フモール」を選び、その概念をジャン・パウルの著作「陽気なヴッツ先生」を詳細に読み解くことで導き出した。またシューマンのウィーン滞在の時期にもっともフモールの精神が表れたとして3つの作品、「アラバスク」、「花の曲」、「フモレスケ」に焦点を当てて曲の在り様を見つめ直そうとした。人間の心の推移を見つめ、滑稽さと崇高さ、有限と無限などの事象自体と、それらを見据える視点をも探り、さらには対極する概念の間で揺らいでいるものを汲み取ろうとする。それらがシューマンの音楽作品にどのように反映したかを表わした丁寧な記述は、文学と音楽の結び付きの一端をわかりやすく提示している。3曲の分析も緻密な分析が為されているが、中では「フモレスケ」op. 20の後半が手薄になっている点が惜まれる。

また 2月10日の奏楽堂での演奏では以上の3曲と、後半に後期の大作、ヴァイオリンソナタ第2番ニ短調op. 121が披露された。どの曲も丁寧な読譜と誠実な表現で、論文で記述された内容を響きに置き換える努力がとてもよく伺えた。ホールの音響の特性とニュアンスの表現伝達が結び付きにくい難しさや、さらに思い切ったファンタジーの発露を求めるのは共通した評価だった。ただ音響の把握という事では、ゲネプロがほとんど出来ない今年度の時間設定を考えると、本人も特に難しかったかも知れない。

なお論文については緻密な論考内容の他にも、シューマン自身の若書きの小説を訳す試みに対してと、誤記が極めて少ない点についても高い評価が与えられている。論文、演奏両方相俟っての極めて優れた業績と認める。